

(……きて……お……め……まし……)

今日はとても自然に起きられた。

私は今でも母の起こす声が聴こえるほどに、朝は弱いのだが何故だろう。今日は眠気もなければ体も重くない。朝とはこんなに気持ち良かったのか。

早々に身支度を整えてアパートの階段を降りる。

軽快だ。普段は鉛のように重くなる会社へ向かうこの足。

今日は何だろう。地面から浮いてるかのよう軽い。

(……………き…える？……ね……めを……)

そのまま気分良く会社へと着いた。階段を飛ぶように駆け上がり、職場へと向かう。

「〇〇くん、ちょっと来て下さい」

ああ……。気分が良かったのもここまでか。上司の呼ぶ声に一気に現実へと引き戻される。この上司から私は小言以外の言葉を聞いたことがない。

「はい、何でしょうか……」

「ああ、実は君が前に提出した案。あれを通そうと思ってね」

「ほ、本当ですか！ ありがとうございます」

再び私は舞いあがる。まさかこの上司からこんな言葉を聞くことがあるとは。

「おめでとう〇〇くん」

「良かったな！おめでとう」

同僚たちも口々に喜んでくれた。

この会社で働いていてよかった。

(……………っ！お………をさ……)

昼食の時間になる。

私はちらりと同僚の女の子を見る。彼女はいつも通りに弁当を持っていた。きっと他

の女子社員とこれから食べるのだろう。

多くは望まない。私はどこにでかけて食べようか。などと考えていると、彼女がふいに立ち上がりこちらに歩いてくる。

「あの……迷惑じゃなければお昼ご一緒しませんか？ 私その……お弁当作ってきたので」

こんなことがあるのだろうか。私は勿論二つ返事です承した。上手く言葉になっていたかも怪しい。

私と彼女は会社の奥、今は倉庫などしかなく人気のない通路を進み、途中の階段へと腰かけた。座るにはやや冷たいと思ったが、気持ちに余裕がないせいか何も感じなかった。

それから楽しい時間が流れる。どうしても良いことを話し合っただけだが、それでも楽しかった。

例えば昨日私が階段から落ちたことを話すと彼女は本気で心配してくれる。

——大丈夫だったんですか？

——怪我はありませんでしたか？

大丈夫。そこそこの高さから落ちたはずなのに、怪我ひとつなかった。昨日はツイてないなあと感じたが、今思えばあれで怪我ひとつなかったのは奇跡だろう。

今日のこの良い流れもそこから始まった気すらしてきた。

彼女もホッとしたようで笑ってくれる。そして言う

——この楽しい時間が終わらなければいいのに。

私はそれに応える。大丈夫だ、と。

大丈夫。私にはこの幸福が、永遠に続くものに思えてならないのだ。

